



TITLE:

「初等天文学講話」を紹介す

AUTHOR(S):

水野, 千里

---

CITATION:

水野, 千里. 「初等天文学講話」を紹介す. 天界 1932, 12(132): 158-159

ISSUE DATE:

1932-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161895>

RIGHT:

## 〔初等天文學講話〕を紹介す

木 野 千 里

本書はお馴染みの山本一清博士の好著であります。恒星社の發行で、定價金貳圓五拾錢であります。

初學者の人達から、〔最初に讀むべき天文書は何か〕と、度々問はれますが、好い書物がないので、お答へに窮して居ましたところ、山本博士が良い本を書いて下さいました事を感謝致します。

博士は斯道の爲め御多忙のことはいふ迄もなく、又、東奔西走、席あたゝかなるに暇なしといふ有様なるに拘らず、日々お仕事の暇々に筆をお執りになりましたところの力作であります。その書き振りが親切で、要領を得て居ますので、これなら初學者の人達に満足を與へることを保證致します。

博士の序文の中にあります様に〔チヨークにまみれながら講話する積り〕でお書きになつたのであります。

専門學者の書物は、如何に平易に書いたといはれましても、六ヶ敷いのがおきまりであります。流石は民衆を相手に各所で講話されます博士のことでありますから、その手心がよくお判りになつて居ますので、こんな結構な書物をお書き上げになつたのであります。これで初學者は無論のこと、一通り天文書を繙いた人達も、これによつて今迄の知識を取り纏めるのによい本であります。

本書は序文、目次、本文、索引から成つて居ます。それに寫眞版及び挿圖が口繪の外に百四十八圖、圖表二、附録として簡易星圖が一葉あります。その書き振りが平易で、搔いところに手のとゞく様に、讀者をして満足させます。

緒言〔天文學とは何ぞや〕から解き起し、天文學の定義として〔天文學とは天體や宇宙に關して研究する學問でありまして、昔から何れの國でも之れを社會生活上最も大切な高尚な學問としてゐました〕と喝破して居られます。それから進んで、天球學、天體力學、天體物理學の順序で述べられることを定められて居ます。

第一章 星座と天球學は天球、種々の座標、星座、日週運動と年週運動、

地球上の経度、緯度、日食と月食、歳差と章動、アベラシオンと視差、遊星の運動、望遠鏡の十節に別ち、これを更に細かく分けて説明してあります。

第二章 天體力學に入つては、引力説、軌道の問題、軌道の要素、攝動、太陽系の組織と進化、第三章 天體物理學は太陽の正體、太陽論、日食の研究、地球、火星、金星と水星、木星、土星、天王星、海王星など、地球の月、彗星と流星、恒星、星の光度とスペクトル、星界の統計、固有運動と視線運動、重星と連星、變光星、星霧と星團とに細分して、到れり盡せりであります。

本書は讀むべき書物であると同時に、又、見るべき書物であります。口繪には冬の南天の星座が繪入りで、天で最も賑かなオリオン星座を中心しまして、牡牛、双子、大犬星座などが載せてあります。美しい寫眞版や挿圖が殆んど毎頁にありまして本文の説明を補ひ、天文學者の寫眞も多く出て居ますので、感じが非常によろしい。星座一覽表は時々他の著書にもありますが、木星の衛星の陰顯圖の如きは、天文年鑑以外には見當りませんで、小望遠鏡所有者はこの圖にヒントを得て日々の衛星の位置のスケッチをされたならば、一層妙味を悟了せられることゝ存じます。又、簡易星圖を巧に利用せらるゝならば、肉眼的恒星の名前や位置を覺えられる助けになることは無論であります。

要するに本書は初學天文研究者の虎の巻でありまして、この一卷さへ讀破されたならばアマチュア天文家として充分であります。趣味の天文學を研究される人々は座右に必ず一本を備へられ、晝に夜に本書を友とせられ、高尚なる心境に入り、宇宙の嚴肅審美を味はれることは、思想を善導する上に最も必要と存じます。これ邦文初等天文書の白眉として、世に御紹介する所以であります。

### 志願助手を募る

志願助手若干名を募る、但し無給。至急、履歷書を添え、山本臺長あて申込まれたし。

1932年3月20日

花山天文臺